患者さんを想像する力

Aさんは50代男性で脳血管疾患にて緊急入院となった患者さんでした。発症から数日後、救急病棟から病棟に来られた時は意識レベルJCSⅡ-30程度、失語や右麻痺もありベッド上安静の状態でした。Aさんは単身赴任であり、ご家族は入院直後のAさんの様子をみてショックを受けていたようですが、コロナ禍の影響もあり中々来ることは難しい状況でした。

A さんの寝たきりの生活は続いていましたが、意識レベルが少しずつ回復するにつれて、意思疎通が図れるようになってきました。A さんはリハビリも積極的に頑張っており順調にすすんでいると思われましたが、ある日一緒に嚥下体操をしていた時に「もうやめる。飽きた」と小さく呟き、「入院生活は退屈」と続けて言いました。私はAさんの言動に驚きましたが、Aさんの状況を考えると、Aさんの辛い気持ちや先行きの見えない不安など様々なことが想像できました。そしてAさんの入院生活の励みになりそうなことを考えました。Aさんは50代の働き盛りであり、ましてや単身赴任で長い間ご家族には会えていませんでした。また突然の病気の発症により、今まで当たり前にできていたことができなくなってしまったことに苛立ちをみせていたこともありました。私はそんな状況の中でも、A さんがご家族のお話は楽しそうにしてくれたのを思い出しました。病室には楽しそうな家族写真や、お手紙がたくさん飾られており、それを見ながらお話したこともありました。そこで私は A さんに「ご家族にお手紙を書いてみてはいかがですか？いいリハビリにもなりますよ」と提案しました。A さんはしばらく考えた様子で、「何書けばいいの？　今さら恥ずかしい」とおっしゃったので、私は「何でもいいと思いますよ。リハビリ頑張ってるとか、今日の出来事とか、普段は口では言いにくいこととか。どうですか？」とお伝えしました。するとAさんは照れくさそうにしながら「リハビリがてら書いてみようかな」と前向きな様子でした。

数日後に A さんのもとに訪れると、「看護師さんに言われてから、毎日日記みたいに書いてるよ。見せてあげる」と手紙を見せていただくことになりました。目を通すと手紙には「リハビリ頑張ってます」「これから迷惑たくさんかけると思うけど、一緒にいてくれますか」「いつもありがとう」
と、Aさんの精一杯の言葉が綴られていました。Aさんは「恥ずかしいけどこれならいいね」とはにかんで言いました。ご家族が来たときにお手紙をお渡しすると、ご家族が返事のお手紙を書いてくださり、その中には「家族みんな待ってるからね」と励ましの言葉がありました。Aさんはお手紙を読みながら、「リハビリ頑張らないとな」と嬉しそうに言いました。

そこからはAさんのリハビリの頑張りもあり、日常生活を送れるくらいまで回復し、転院となりました。転院当日に A さんは私に「みなさんがいてくれたから頑張れました。入院生活も悪くなかったよ、ありがとう」と言い、ハイタッチで見送りました。私は、「手紙」という些細な提案でしたが、Aさんの入院生活が少しだけでも充実したものになった関わりができたと思い、嬉しく感じました。

私はこの経験から、患者さんの思いを汲み取り寄り添う努力、また想像力の大切さに気付かされました。また、患者さんが今まで生活してきた背景をもとに、これからの生活を見据えて関わっていかなければならないと改めて感じました。患者さんと一括りにいっても、病気はもちろん、療養場所や必要な支援、それぞれの性格、家族、社会背景など１人１人に個別性があります。医療や看護の世界では「個別性」という言葉をよく耳にしますが、その意味を今一度よく考えて、多職種の人たちと上手く連携しながら、看護師として患者さんの療養生活に寄り添い、歩んでいきたいです。